

〈報告（査読付き）〉

早稲田大学稲門シナリオ研究会 初期作品発見について

——黎明期学生映画試論——

池 元 慎

1. はじめに

本報告は、筆者が早稲田大学稲門シナリオ研究会倉庫⁽¹⁾から『九十九里』（1953）と『彦市ばなし』（1954）を発見したことに端を発する。加えて、製作過程に関わるいくつかの資料も同時に倉庫内から発見した。管見の限り、『九十九里』は日本の大学映画サークル自主製作の中で現存が確認できる最古の作品であることから、史料的価値が極めて高いものであるのは疑いようがない⁽²⁾。1950年代大学映画サークル自主製作の実態についての先行研究はほとんど存在しておらず、その歴史的、文化的価値は汲み尽くされていない。そのため、本報告では初期学生映画に近い先行研究をまとめつつ、発見されたフィルムの概要と調査結果⁽³⁾を報告する。

2. 学生映画研究の諸状況

1950年代の大学映画サークル自主製作に特化した先行研究は存在しないため、この主題を二つの領域に分割して、研究の動向を確認する。一つは「大学自主製作」という側面、もう一つは「1950年代映画サークル」という側面である。

大学自主製作の歴史的意義という観点から見ると、後に作家性を獲得する監督たちによる最初期の活動として、大学時代の作品は作家研究の範疇で参照され続けている。例えば、大学自主製作映画の嚆矢としてあげられるのは、足立正生らによって立ち上げられた「日本大学新映画研究会」製作の『椀』（1961）や『鎖陰』（1963）である。安保闘争敗北後の閉塞感が漂い、後のフィルモグラフィーを予感させることから、足立正生の作家性を考える上で避けては通れない⁽⁴⁾。また、時代を下り1970年代末から80年代にかけての立教大学「パロディアス・ユニティ」の活動を例にあげてもよいだろう。90年代以降の日本映画を代表する黒沢清、万田邦敏、塩田明彦などの作家たちの活動は、押し並べて大学時代の作品にその源泉を見出せる⁽⁵⁾。このように、大学自主製作作品は作家研究の起点として

参照され続けている。しかし、「日本大学新映画研究会」以前、つまり1950年代前半の映画サークルによる自主製作活動は、作家主義的に言及される作家の不在も影響してか、研究対象どころかその存在も知られていない⁽⁶⁾。

一方で、1950年代の映画サークル運動に関しては、サークル研究の文脈からその歴史的な意義が明らかにされつつある。例えば、成田龍一は全国映画サークル東海地方協議会の事例をもとに、観る主体と制作する主体が一致した50年代の特殊な状況を指摘している⁽⁷⁾。また、佐藤洋は観客論的にサークルを捉えることで、サークル運動に対する主要な批判であった政治主義的側面ではない50年代のサークル運動の実情を明らかにしている⁽⁸⁾。これらの研究は、50年代の映画サークル運動が上映会やサークル誌の頒布などの多様な活動を展開していたことを示している。また、独立プロの活動を支援するべく映画サークルが資金集めを主導する運動も、50年代映画サークルにとって重要な活動であった⁽⁹⁾。しかし、これらの研究でも実際にサークルの構成員がカメラを手に撮影するという意味での自主製作については、ほとんど無視されている。

3. 早稲田大学稲門シナリオ研究会

報告の前提として、これらのフィルムの製作母体である早稲田大学稲門シナリオ研究会とは如何なる組織なのかを確認する。早稲田大学公認映画サークルの一つである稲門シナリオ研究会は1952年に設立され、早稲田大学に現存する映画サークルの中で2番目に古いサークルである⁽¹⁰⁾。稲門シナリオ研究会設立の詳しい経緯は、キネマ旬報の「映研便り」という映画研究会の活動を紹介するコーナーに詳しい。後に稲門シナリオ研究会から独立する形でできた「第四ぶろだくしょん」という組織の創始者が書いた文章によると、その経緯は以下の通りである。

さらに朔のぼった六年まえ [1949年]、早稲田高等学院入学の当時、まだ新制高校として発足したばかりのことで、映画部すらなく、新たにこれを設け、怪しげな理論より実際の映画製作をと、学校に撮影機を購入するように頼み込み、学院の記録を撮るとの条件でやっとカメラを手にしたことが、あるいは「第四ぶろだくしょん」結成への、そもその動機となったのかもしれませんが。十六耗サイレント版でしたが、三本の記録映画を撮り、学部に進んだ後、文学部に入った友達に呼び掛け、集った二十数人で稲門シナリオ研究会（のちに“彦市ばなし”を作ったグループ）を結成、高等学院のカメラを使用して第一作「麦食う人々」を作りました⁽¹¹⁾。

当時、自主製作映画のための機材を個人で集めることは経済的に困難であった。そのため初期稲門シナリオ研究会の撮影は早稲田高等学院によって購入されたカメラを活用していたと推測できる。さらに、早稲田大学演劇博物館に所蔵されている『彦市ばなし』脚本の

裏表紙に貼り付けられた「製作ニュース」というビラの中には、当時のサークルの風土を説明している箇所がある。そこには、稲門シナリオ研究会が「早大芸術科在學生を中心に映画界での生活を望む學生が集りシナリオの研究から、実製作迄の勉強を続けている」組織であると記されている¹²。つまり、自主製作することと映画界で生活することが設立当初から意識されていた。その活発な風土を裏付ける事実として、稲門シナリオ研究会は1952年から1954年の間に『麦食う人々』（1952）、『学生の斗い』（1953）など計6作品を撮影した¹³。しかし、現存が確認できたものは、今回発見された『九十九里』と『彦市ばなし』の2作品にとどまる¹⁴。

4. 発見フィルム概要

正方形の紙製の箱に入った上映用16ミリフィルム2点が発見された。フィルムは若干の酢酸臭がしたものの保存状態は良好であり、上映可能であった。以下はそのあらすじ、製作、上映についての概要である。

『九十九里』（1953）

見つかったフィルムは、白黒16ミリポジフィルム1巻、14分。サウンド・トラックは光学録音で、エアタイプであった。ネガは発見されていない。

あらすじは以下の通りである。合唱をバックグラウンドミュージックに男の語りが始まり、映像は上総片貝駅やその周辺の街並みを映し出している。男の語りは、代々親方に依存しながら漁業を営んでいると語る。そして、浜に基地が建てられたことへと話が移行し、基地の看板や塀の映像が映される。自らの町への誇りを語り、陽気な音楽とともに、砂浜から船を出す人々の映像、そして漁の様子が映されていく。しかし、米軍の射撃演習が始まると、漁場を離れなくてはならない。ただでさえ貧しい生活に加えて、飛行機の音が常にうるさく飛びまわっているこの生活を変えるべく、漁師たちは国会陳情に向かう。全国の基地問題を巻き込んだ男の語りにも声高で戦闘的なムードが漂う。「民族独立行動隊の歌」が流れる中で、闘争への覚悟を語ることで幕が閉じられる¹⁵。

調査の限り、『九十九里』は大学映画サークルによって製作された作品の中で現存する最古の作品である。撮影の正確なスケジュールに関する記録は残っていない。しかし、タイトル画面に書かれた「一九五三」の文字から、1953年であることはほぼ確かである。さらに、映画内に「房総平和大会」と書かれたビラのショットとその大会と思われるシーンがある。この大会は千葉市で1953年8月15日に開催されているため、撮影時期はこの前後だと推測できる¹⁶。

では、この映画は如何にして見られたのだろうか。『九十九里』が劇場で上映された記録は確認できない。しかし、劇場公開に必要な映倫審査を受けた記録が存在している。この映画倫理規程審査記録からは上映に関わるふたつの興味深い事実を指摘することがで

きる⁴⁷⁾。一つは審査コメントに「漁師の女の裸体、風俗上の点から削除を希望し実行された」と書かれていることである。しかし、実際に発見されたフィルムには、漁に出る女性の裸体が映り込んでいる。発見されたフィルムのタイトル画面に映倫マークがなかったことと合わせて考えると、この残されたフィルムは、試写の際に上映されたバージョンである可能性が高い。もう一つは、試写が1955年5月と完成からやや遅れていることである。なぜこの月に映倫審査を受けたかは不明である。あえて理由を推察するなら、同月に『無限の瞳』(1955)の審査を行った記録が一つの鍵になるかもしれない。成城高校の学生によって製作された『無限の瞳』という白血病のため亡くなった同級生についてのドキュメンタリーは、同時代の自主製作映画として現在でもよく知られたものである。この『無限の瞳』製作には稲門シナリオ研究会が映画製作を進言した記録が残っている⁴⁸⁾。そのため、『無限の瞳』完成によって、同時上映などを企画した際に審査が必要となったのではないだろうか。

『彦市ばなし』(1954)

見つけたフィルムは、16ミリポジフィルム1巻、20分。サウンド・トラックは光学録音で、エアタイプであった。ネガは発見されていない。後述するように撮影は35ミリであり、そのリダクション・プリントであると考えられる。

あらすじは以下の通りである。彦市が釣りをしながら、持っている蓑を身にまとうと、姿が消えてしまう。一方で、小天狗は泣きながら大天狗に隠れ蓑を取られたことを報告し、回想シーンへと繋がる。彦市はただの釣竿を「天竺渡り千里見通しの遠めがね」と嘘をついて、姿が見えなくなる小天狗の隠れ蓑を取り上げたのだった。大天狗に怒られた小天狗は、必ず隠れ蓑を取り返すと決心する。他方、呑気に釣りをしている彦市のもとに、殿様が通りかかる。「河童を釣っている」と殿様に言った彦市は、釣るために鯨の肉が必要と嘘をつき、殿様を騙して鯨の肉を手に入れる。その場に居合わせた小天狗は、殿様が去った後に、風呂敷に包まれた鯨の肉を隠れ蓑と間違えて持って逃げた。実は隠れ蓑は既に彦市が自宅に隠しておいたのだった。家に帰った彦市は、妻が小汚さゆえに、タンスに隠していた隠れ蓑を燃やしてしまったことを知り、愕然とする。それでも燃やした灰を体に塗り、姿が見えなくなったことで、外にただ酒を飲みに行く。酒に酔った彦市は透明のまま川岸で眠ってしまい、その姿を小天狗が見つけて大格闘となり、彦市は川へと落ちる。すると、川の水で身にまっていた灰は流れてしまい、彦市の姿があらわになる。そこに殿様が通りがかり、小天狗を河童と思い込んで、その戦いを囁し立てる。

『彦市ばなし』は、フィルムと同時に発見された資料である「稲門シナリオ研究会公文書第二号」にその大雑把な製作スケジュールが記載されている。それによれば、1953年12月10日に決議が行われ、企画が採用されている。これ以降の正確な資料はないものの、1954年2月にはスタッフの決定と決定稿完成。3月にリハーサル。4月にクランクイン。

5月第1週に公開予定という仮スケジュールが採択されている²⁰⁹。実際の製作も概ねこのスケジュール通りになったと考えられる。なぜなら、4月1日の朝日新聞にこの映画のクランクインを伝える記事が掲載されているためだ²¹⁰。また、映画倫理規程審査記録によると1954年5月に審査を受けていることから大きく仮スケジュールから逸脱したとは考えにくい²¹¹。

『彦市ばなし』の製作上の特異な点は2点ある。1点目は、発見されたフィルムは上映用16ミリポジフィルムだが、35ミリによる撮影であるということだ。前述の朝日新聞の記事によれば、従来の大学映画サークルが16ミリでのドキュメンタリーが主であったのに対して、35ミリの劇映画であることが強調されている²¹²。さらに「製作ニュース」には、35ミリでの撮影について以下のように書かれている。

現在最も切実な事は、組織的映画上映が製作活動に協同していないのと云う事です。従ってこの活動は全学生のものになっていない状況です。そこで私達は、これらの問題を解決させると同時に、社会に対して学生自主映画運動を、問題提起させるために、三十五耗の映画製作をとり上げる事にしました²¹³。

これらの資料から、学生映画としては異例の35ミリ撮影がなされていたと考えられる。この映画の規模の大きさを証拠立てるのは、撮影規模だけでなく関わった人物の名前によっても明らかである。「製作ニュース」内の「製作を指導して下さる人の言葉」として、脚本：井手俊郎²¹⁴、演出：山本薩夫²¹⁵、音楽：團伊玖磨²¹⁶からのコメントが寄せられている。また、原作者の木下順二からも「自身初めての映画化」であるという趣旨のコメントが寄せられている²¹⁷。実際にこれらの人物が製作に携わった程度はわからない。しかし、これらの名前が出てくる理由は、明らかに山本薩夫のキャリアが東宝争議以降の独立プロ時代にあたることが関係しているだろう。つまり、大会社の映画製作から離れて映画を撮らなくてはならない時期であるため、前述のようにサークル組織からの支援は必要不可欠であった。その結果、独立プロとサークル自主製作運動が何らかの接点を持つに至った可能性を仄めかすものである²¹⁸。

もう1点は、教育映画配給社²¹⁹によって配給されていたことである。教育映画は戦後、GHQ内の民間情報教育局、いわゆるCIEによって、日本の民主化のため積極的に推奨されていた。そのため、この時代に教育映画が黄金期を迎えていたことが背景としてある。つまり、教育映画の需要が高まっており、その中に学生の作品が入り込む余地があったことは想像に難くない。しかしそれにしても、学生映画の枠組みで撮影されながら、配給網にのっていたという事実は、後年の学生映画の非商業的なイメージを覆すものであるだろう²²⁰。

上映記録としては、『九十九里』と異なり様々なパターンで上映されていたことが確認

できる。例えば、秋田県の花輪鉱山にて、早稲田演劇研究会との共催で鉱山労働者に向けた上映会を行っていた記録が残っている⁸¹。また、ホールを借りて大学同士の上映会という形式でも上映されている⁸²。さらには、夏休みに関東諸県の小学校での巡回上映に行ったという OB からの証言もある⁸³。

5. 今後に向けて

以上が早稲田大学稲門シナリオ研究会による最初期の自主製作映画発見についての報告であった。本報告では、1950年代の大学映画サークル自主製作が研究対象とされていない事実を指摘した。その上で、『九十九里』では映倫審査記録と現物のフィルムを突き合わせることでその歴史を辿り直した。また、『彦市ばなし』では大学自主製作映画のイメージからかけ離れた、35ミリによる撮影と配給網にのっているというふたつの特徴を指摘した。このふたつのフィルムの例だけでも明らかなように、黎明期の学生映画が日本映画史やアマチュア映画史と接続し得る歴史的価値を持つことは論を俟たない。

報告というスタイルの性質上、2本の映画をめぐるコンテクスト情報が中心となっており、テキストの生成過程や、テキストの内容が持つ問題については少ししか触れることができなかった。この点を発展させることを今後の課題としたい。そして、その課題の先には1950年代学生映画の全体像を、より正確に日本映画史の中に位置付ける仕事が必要となるだろう。

注(1) 早稲田大学稲門シナリオ研究会倉庫は、2001年に開館した早稲田大学学生会館内にある。2001年までフィルムが保管されていた場所は、稲門シナリオ研究会部室がかつて割り当てられており、現在では取り壊された第一学生会館であったと考えられる。

(2) 1953年以前の大学サークルによる自主製作映画として、東大自由映画研究会による『十月闘争の実写』(1950)や『若き智慧の選手たち』(1951)などが知られているが、現時点でその現存は確認できていない。

(3) 現時点で、直接2本の撮影に関わった人物からお話を伺うことはできなかった。製作において中心的な役割を果たしていたと見られる片桐直樹氏(1952年入学)はすでに鬼籍に入られていた。また、その他のクレジットされている人物を発見することができなかった。しかし、OBの並木章氏(1954年入学)や鈴木泰弘氏(1954年入学)へのインタビューによって、この2本の上映活動や広報活動についてのいくつかの事実を伺うことができた。その内容は本報告に組み込まれている。

(4) 設立直後の日大映研とその後の展開については以下に詳しい。平沢剛編『アンダーグラウンド・フィルム・アーカイブス』河出書房新社、2001年。

(5) 「パロディアス・ユニティ」の例で言えば、黒沢清『School Days』(1978)や万田邦敏『四つ数えろ』(1978)など。近年でも、濱口竜介の『何食わぬ顔』(2003)は、後年の作品との連続性において論じられる大学映画サークル時代の自主製作映画である。

(6) 例外的な戦前の学生映画として、日本プロレタリア映画同盟(通称プロキノ)が製作に協力した『スポーツ』(1932)があげられる。早稲田のアートオリンピック祭で上映され、大学に

- よるスポーツ教育の不備、一般学生への運動設備開放を訴える作品である。製作には学生時代の山本薩夫が関わっていたことでも知られている。
- (7) 成田龍一「サークル運動」の時代——1950年代・「日本」の文化の場所」河西英道ほか編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ——多文化の歴史学と地域史』岩田書院、2005年、245-260頁。
 - (8) 佐藤洋「映画を語り合う自由を求めて——映画観客運動史のために」黒沢清・四方田犬彦・吉見俊哉・李鳳宇編『日本映画は生きている 第三巻 観る人、作る人、掛ける人』岩波書店、2010年、13-41頁。
 - (9) 日本炭鉱労働組合北海道地方本部加盟の炭鉱労働者のカンパによって製作された『女ひとり大地を行く』（1953）や農業協同組合婦人部が一口10円から3,200万円を集めたとされる『荷車の歌』（1959）は、その成果によって生み出された作品である。また、関西のサークル活動を主導した山本明による膨大なコレクションを特集した以下の号が、1950年代のサークル文化について詳しい。京都大学人文科学研究所『人文學報』第116号、2021年。
 - (10) 1918年設立の「早稲田大学映画研究会」が早稲田大学に現存する最古の映画サークルである。
 - (11) 橋逸夫「『第四ぶろ』の足跡」『キネマ旬報』1955年3月上旬号、129頁。
 - (12) 早大稲門シナリオ研究会「製作ニュース」『彦市ばなし』1954年。早稲田大学演劇博物館所蔵。この「製作ニュース」によると、会長（大学側の責任者）が郡司正勝。顧問は河竹繁俊と印南高一であったことが示されており、それぞれが『彦市ばなし』製作に関してわずかなコメントを寄せている。つまり、サークル活動を支えた大学側の教授も、1946年に設立された文学部芸術科（のうち演劇科）に近い立場の人間であった。
 - (13) 早大稲門シナリオ研究会「製作ニュース」『彦市ばなし』。
 - (14) 現存が確認できない『麦食う人々』『学生の斗い』であるが、そのスチル写真が雑誌に掲載されている。「学生自主映画」『映画評論』1956年8月1日号、8-12頁。
 - (15) あらすじから明らかなように1948年に始まる九十九里闘争を撮影したものである。1953年は亀井文夫が『基地の子たち』によって基地問題を取り上げた年である。谷口千吉『赤線基地』も同年であることが、映画界が基地問題を積極的に扱いだした年であることを証拠立てる。九十九里闘争についてのルポルタージュが刊行されている重要な年でもあることから、同時代的な潮流にアクチュアルに反応していると言えるだろう。鬼生田貞雄『基地九十九里』東和社、1953年。
 - (16) 千葉県労働組合連合協議会『千葉県労働運動史』労働旬報社、1967年、1099頁。
 - (17) 映画倫理規程管理部事務局『映画倫理規程審査記録』第71号、1955年、39頁。
 - (18) 西江孝之「世界学生映画運動の展望」『キネマ旬報』1956年4月下旬号、97-102頁。
 - (19) 『稲門シナリオ研究会公文書第二号』1954年。個人蔵。
 - (20) 「早大生が初の劇映画製作」『朝日新聞』1954年4月1日付夕刊、3頁。
 - (21) 映画倫理規程管理部事務局『映画倫理規程審査記録』第59号、1954年、C-9頁。
 - (22) 「早大生が初の劇映画製作」『朝日新聞』。
 - (23) 早大稲門シナリオ研究会「製作ニュース」。
 - (24) 井手俊郎は、同年に成瀬巳喜男の『晩菊』（1954）の脚本を担当している。1951年にフリーとなっているものの、東宝の代表的な脚本家として最も多作な時期である。
 - (25) 山本薩夫は自著にて、『太陽のない街』（1954）の撮影中に、弁当代が出ないことに怒ったエキストラがストライキを起こし、その先頭に立ったのが当時早稲田大学の学生であった小島義史（『戦争と人間』（1970）助監督）や片桐直樹（『映画監督 山本薩夫』（1993）監督）であったことを語っている。小島は今回の2作品に、片桐は『彦市ばなし』にクレジットされている。これは、独立プロ時代の山本と稲門シナリオ研究会との接点を示していると言えるだろう。山本薩夫『私の映画人生』新日本出版社、1984年、168-169頁。

- ②6 團伊玖磨は、木下戯曲で1952年に上演されたオペラ『夕鶴』の作曲者でもある。また、1954年には東宝の専属音楽監督になっている。
- ②7 さらに、「製作ニュース」には文部省視聴覚教育課の小林馨という人物からのコメントが寄せられており、ここからも一大学サークルの自主製作に留まらない規模であったことが伺える。
- ②8 小川紳介は戦後ドキュメンタリーを振り返る中で、独立プロと大学自主製作映画に繋がりがあったことを回顧している。さらに、その中で『九十九里』と『彦市ばなし』についても言及している。小川紳介「私論 戦後日本ドキュメンタリー映画史」『【増補改訂版】映画を獲る』山根貞男編、太田出版、2012年、260-286頁。
- ②9 教育映画配給社は「東宝教育映画部」が東宝本体から切り離されてできた「東宝教育映画株式会社」の映画を配給する会社として1949年に創立した。
- ③0 配給網にのっていた一つの証拠として、教育映画の専門誌『視聴覚教育』にその批評が掲載されている。『視聴覚教育』1954年8月号、38頁。
- ③1 『秋田魁年鑑』1955年版、秋田魁新報社、1955年、158頁。
- ③2 『キネマ旬報』1956年1月上旬号、183頁。
- ③3 並木章氏への筆者によるインタビュー。また、OBの鈴木泰弘氏は、入学して最初の仕事が『彦市ばなし』の批評を各マスコミにお願いしに行く仕事であったと語る。その成果か、一般紙にも映画評が掲載されている。「ソツのない出来」『毎日新聞』1954年5月31日付夕刊、4頁。